

## 大阪大学先導的学際研究機構

### 「新たな防災」を軸とした命を大切にする未来社会研究部門



夢はバラ色

木 多 道 宏\*

The Institute for Open and Transdisciplinary Research Initiatives (OTRI)  
Research Division for Future Society that  
Values Life with a focus on “New Disaster Prevention” (New-POD)

Key Words : New Disaster Prevention, Life, Future Society, Mental World, Co-creation Field

#### はじめに

2022年4月、大阪大学先導的学際研究機構(OTRI: Institute for Open and Transdisciplinary Research Initiatives, OTRI)に、「『新たな防災』を軸とした命を大切にする未来社会研究部門(New-POD: Research Division for Future Society that Values Life with a focus on “New Disaster Prevention” (部門長: 経済学研究科 堂目卓生教授)が立ち上がりました。OTRIは、「学問分野の多様化が進み、社会との連携が求められている中、組織・社会・国境等の垣根を越えた協働による先導的学際研究をより一層推進し、新学術領域を創成する組織」として2017年に設置されたもので、現在13の研究部門が設けられています。理系の分野の中での学際連携が多い中、当部門は、社会ソリューションイニシアティブ(SSI)を中心に文理にわたる研究者が連携して取り組む初の部門として注目されています。

この投稿原稿の前半部分は、SSIのホームページのマンスリー・トピックス(2022年8月)に掲載した記事を踏襲するものですが、後半部分では、その後の新たな活動内容をアップデートするかたちでNew-PODを紹介させていただきます。

#### 「新たな防災」とは何か

「新たな防災」とは、「防災」そのものの実践を最終の目標とするのではなく、「防災」という活動を通して、人口減少、コミュニティの衰退、産業の衰退、社会格差、気候変動など、現代における様々な社会課題・地球規模課題に立ち向かい、解決に向けた活動を継続することを指します。極論すれば、たとえ災害がおとずれなくとも、「新たな防災」の活動は、人や社会を未来に向けて持続的に発展させていくものだという事です。

それでは、人や社会の発展とは何でしょうか。それは、「心の成長」を価値観の中心に置き、「心の世界」を広げていくことです。図1をご覧ください。「心の世界」は、相互扶助やまちづくりなど日々の繋がりを通して、人と人の間に形成されていく高次元の世界です。町や地域社会を良くしたいという思い、自分だけでなく他者を幸せにしたいという思いが込められた世界であり、地域や一人ひとりに辛い出来事があったとしても、それを乗り越えることで、新たな「気づき」が得られ成長する世界でもあります。

#### 戦後の近代化の課題

戦前の地域社会では、「心の世界」の思いが形となって、社会組織や地域行事などの「社会関係の世界」や、建物、道、水路、インフラ構造物からなる「物理的世界」が成立していました。「自然・生態系の世界」から食べ物や資源を得るために、協同組合や企業などの社会組織を形成し、田畑の開墾や工場の建設などを通して自然を改変することもあります。そもそも、「社会関係の世界」と「物理的世界」は、「自然・生態系の世界」から人々が生活の糧を得るために、それぞれが相互浸透的な関係を持つものです。

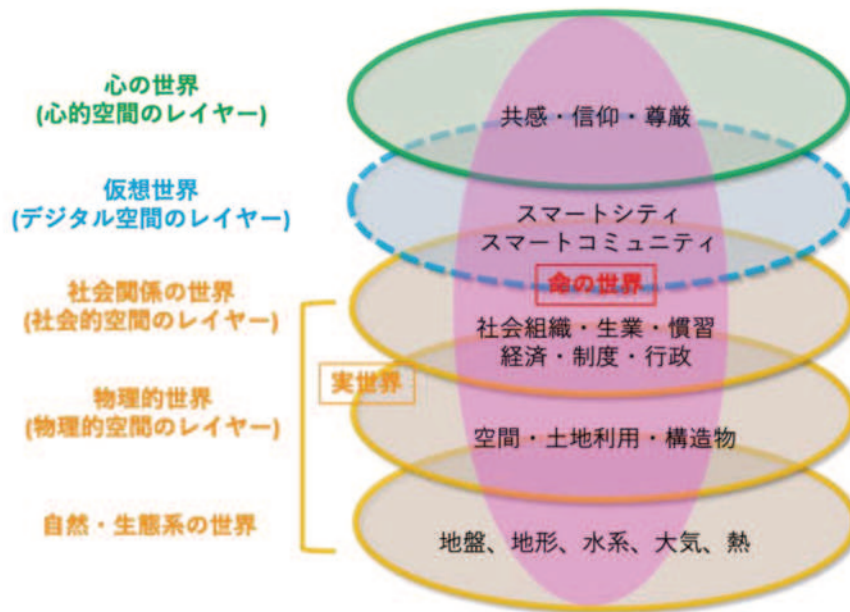
しかしながら、戦後に構築された社会・経済・空間システムが巨大化・硬直化し、「実世界」を構成



\* Michihiro KITA

1964年10月生まれ  
現在、大阪大学 大学院工学研究科地球総合工学専攻/社会ソリューションイニシアティブ副長/「新たな防災」を軸とした命を大切にする未来社会研究部門副部門長 教授 博士(工学)  
専門/建築計画・都市計画  
TEL: 06-6879-7639  
FAX: 06-6879-7641  
E-mail: kita@arch.eng.osaka-u.ac.jp





心の世界と実世界が融合することによって「命の世界」が甦る。  
「命を大切にできる社会」とは物心すべてに注意を払い大切にすることを意味する。

図1 「命の世界の概念」

する社会関係、物理的環境、自然・生態系との関係が分断されるとともに、「実世界」と「心の世界」との関係が乖離してしまいました。大資本による開発は、地域の「心の世界」に配慮せず、過度な改変をもたらすとともに、地域の人々も社会関係や物理的環境の改善を諦め、自然・生態系に関心が持たなくなっていることも原因です。

### 時代の転換期における目標

今後の活動計画を図2に示します。①様々な専門分野の研究者・実践者による「命を大切にできる未来社会を構想するためのワークショップ」の開催、②自治体に出向いてのワークショップやサロン、シンポジウムなど場づくりによる「自治体との広域連携の構築」、③大阪大学でのPBL型授業を通じた「大阪ベイエリアにおける共創フィールドの構築と実践」を行い、大阪・関西万博「いのち会議」に成果を提案していく予定です。

私の専門である建築計画・都市計画の分野を振り返れば、時代の転換期にあって、社会や伝統を分断するような都市開発が多発する時には、命を大切にできる都市計画のあり方を強く訴える専門家が必ず現れてきました。例えば、産業革命の時代、19世紀末

から20世紀初頭にかけて歴史的地区を破壊するような都市開発がヨーロッパを席卷したのですが、スコットランド出身の都市計画家パトリック・ゲデスがコミュニティの命を継承するための「保存手術(コンサパティブ・サージェリー)」という理念を打ち出し、都市の発展を促すためには、過去から現代に至るまでの生命体としての進化の過程を市民とともに理解し、計画に反映させることの重要性を提示しました。この考え方は多くの専門家に強いインパクトを与え、彼が近代都市計画の祖として評価されるまでになりました。しかしながら第二次世界大戦後になると、経済成長を背景に、既存の都市を刷新するような大資本による都市開発が欧州、米国、日本へと一挙に広がることになりました。これに異議を唱えた専門家の中で最も重要な人物の一人が、米国の建築家であり研究者であったクリストファー・アレグザンダーです。部屋・建物・道・広場・近隣・町・都市に「無名の質 (quality without a name)」という命の存在を宿すための建築・都市デザインの重要性を訴え、多くの建築家、都市計画家、研究者、学生たちに大きな影響を与えました。

現代は非常に複雑な時代です。多くの人々は伝統や文化、人間性への配慮、自然・生態系との調和な



	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度以降
	大阪・関西万博 「いのち会議」 との連携						
命を大切に する未来社会の 構想	命を大切に する未来社会を 構想するための ワークショップ						
	構想案作 成の行程 計画 全体コンセ プトの立案	「命」・生命観 の定義 実践を通した再定義 と研究課題の構築	提案構想 の作成	万博に合わ せて成果 の公表	自治体総合 計画等への 反映 世界への普遍化を通した 研究・実践活動の展開	モデルプロ ジェクト計 画への参画	モデルプロ ジェクトの 実現 更なる 発展の探究
自治体との 広域連携の 構築	自治体でのワークショップ、サロン、シンポジウム等による「場」づくり						
	自治体連携 の充実	自治体連携 の充実	未来社会構 想の協働	提案におけ る連携	激甚災害に 対応した 実効的体制 への発展		国の政策化 への貢献
大阪ベイエリア における共創フ ィールドの構築 と実践	PBL型授業の運営 [防災の持続化、コミュニティと生態系の再生など毎年度成果を公表]						
	参画授業の 調整と課題 の準備 パイロット 授業の開発	授業の運営 と新規研究 課題の構築 社会実装PRJ 化の準備	社会実装 PRJの開始	万博に合わ せてPRJの 公表と地 域・まちづ くりの提案	PRJ・研究・授業の運営の 継続 万博による地域・まち づくりレベルでの社会的 インパクトの具現化		他機関との 連携による 活動の展開

大阪・関西万博のレガシーとなるよう、万博終了後も活動を継続する。

図2 大阪大学第4期 (R4～R9年度) および将来の行程計画

どが大切だとわかっているにもかかわらず、グローバル資本主義を背景とした大規模な都市開発がいわゆる開発途上国にも拡大しており、同時に人口減少と縮退、大災害、気候変動など、これまでに経験したことのない課題が複合・山積しています。科学技術も大きな変革を迎える時代の転換点において、文理が融合した「まちづくり」によって、ゲデスやアレグザンダーをも越えた「命の理念」を見出していくことが目標です。

### 命を大切に する未来社会の 構想

当研究部門の活動は、2022年8月にSSI協力プロジェクト「『新たな防災』を軸とした命を大切に  
する未来社会の提案」にも位置付けられ、SSIの全面的なサポートを得ることになりました。2023年2月にはSSIサロンのテーマとして取り上げられ、第17回SSIサロン「『心の世界』と『実世界』をつなぐ『新たな防災』の可能性」が開催されました。堂目部門長と筆者による趣旨説明の後、人間科学研究科附属 未来共創センター 特任教授 榎井 縁先生、Give Space アーバンデザイン方法論主催 井口奈保様、New-PODのメンバーでもある工学研究科教授 入江政安先生、兵庫県危機管理部次長/関西広

域連合広域防災局次長兼防災計画参事 城下隆広様から話題提供をいただき、引き続いて学内外から参加いただいた方々との自由な意見交換が行われました。

助ける人/助けを必要とする人、支援する人/される人といった立場を超えて認め合う共助の関係の中でお互いの命のつながりを実感していくことが時代の転換期に求められていること。そして、本来人々の命は自然・生態系の命と一体であり、他の生き物から奪ってきた生息地を「返す」ことで、命のつながりを取り戻すための都市環境整備 (Give Space アーバンデザイン) が重要になること。土木工学技術は、人と人、人と自然どうしの命の分断と接続との葛藤の中で培われてきたのだということ。この葛藤を克服するための、新たな国土・広域レベルの制度・政策が必要になること。モデレーターとして参加した筆者にとっても、このような命のビジョンと気づきを得る貴重な機会となりました。

また、これに先立ち、New-PODのメンバーによるワークショップ (2022年10月) や、工学研究科によるシンポジウム「テクノアリーナフォーラム: 『新たな防災』を軸とした命を大切に  
する未来社会～地球総合工学からの発信～」(2022年12月) を



開催し、「防災」を通して、社会と科学技術のあり方、未来社会のあり方、命とは何かなどについて本質的な考え方や示唆を得ることができました。さらに活動を継続し、皆様に一定の成果を公表したいと考えています。

#### 大阪ベイエリアにおける共創フィールドの構築と実践

本学には工学研究科地球総合工学専攻が運営する英語コース「アジア圏共創フィールドを活用した海洋・都市圏における地球規模課題解決のための学際的高度人材育成プログラム」があります。このプログラムのPBL (Problem based learning, Project based learning) 型授業である「地球規模課題解決のためのデザイン演習」を改造し、昨年度より、南海トラフ地震での被災が想定される大阪ベイエリアを対象とした取り組みを開始しています。昨年度は大阪市港区より、「防災の産業化」という課題を提供していただき、学生たちが取り組みの成果を地

元の集会所で発表しました。港区政アドバイザーの筋原章博様 (前港区長) や、地域再生に熱心に取り組んでおられる磯路地域活動協議会の方々より貴重なご意見をいただきました。今年度は、港区長の山口照美様より課題を提供いただき、様々な社会課題を捉える複合的な視点から、高齢者、障がい者、外国人や外国にルーツのある人々、子どもなど、いわゆる「社会的弱者」といわれる人々にも配慮した防災対策を検討し、「地域共生社会」の形成に寄与するための活動に着手したところです。

さらに、本学の超域イノベーション博士課程プログラムの履修生を対象としたPBL型授業「超域イノベーション総合」や、学部1年次学生のための学問の扉「デザイン思考による情報端末のユニバーサルデザインを考える」でも、此花区、港区、大正区にかけたエリアをフィールドとして、「命を大切に作る未来社会」のための活動を進めていく予定です。

